

# 生涯スポーツ社会を担う体育的学力を培う授業づくり — 体育理論学習の位置づけの考察を通して —

教職実践基礎領域

大河 紗弓

## I はじめに

連携協力校である豊田市の中学校で、約1年半の期間、学校サポーター活動と、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱをさせていただいた。現3年生を中心に、授業観察や参加、実践をさせていただく中で、教科指導はもちろん、学級経営、生活指導、部活動指導、行事運営などについて、実践的に学ぶことができた。

本稿では、保健体育の「授業づくり」に焦点をあて、「生涯スポーツ社会を担う体育的学力を培う授業づくり— 体育理論学習の位置づけの考察を通して—」をテーマとして、本実習で取り組んだ成果と課題を報告する。

## II 研究主題の設定

### 1 今日の背景と課題

文部科学省中央教育審議会の「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について(答申)」(2008)には、「21世紀は、著しく急速な科学技術の高度化や情報化等により、新しい知識が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域で基盤となり重要性を増す、いわゆる『知識基盤社会(knowledge-based society)』の時代」とあり、この知識基盤社会を生き抜くために「生きる力」が必要であると位置づけている。具体的には、基礎的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力、判断力、表現力等をこれまでも増して一層伸ばしていくことが提言され、確かな学力を子どもたちに身に付けさせるとともに、学習の成果としての学力の保障が、なによりも重要視された。

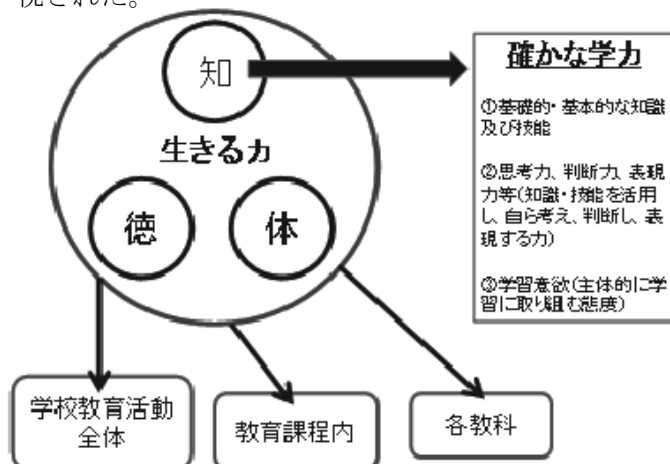


図1: 「生きる力」の理念構造

現在の体育分野の課題として、平成20年に示された中央審議会答申では、運動する子どもと運動しない子どもの二極化、子どもの体力低下、さらに、運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていないという指摘がなされた。

これらの課題を受けて、保健体育科学学習指導要領改訂の基本方針は、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図ること」とされた。改善の手立てとして、学習内容が子どもたちの発達段階に応じて明確に示されることとなった。具体的な内容としては、①生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視し、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、発達の段階のまとまりを考慮し、小学校、中学校及び高等学校を見通した指導内容の体系化を図ること。②指導内容の確実な定着を図る観点から、指導内容を明確に示すとともに、学校段階の接続を踏まえ、第1学年及び第2学年においては、領域の取上げ方の弾力化を図ること。また、第3学年においては、特性や魅力に応じた選択のまとまりから選択して履修できるようにすること。③基礎的な知識の確実な定着を図るため、発達の段階を踏まえて知識に関する領域の構成を見直し、各領域に共通する内容に精選するとともに、各領域との関連で指導することが効果的な内容については、各領域で取り上げるよう整理すること。などが示された。

### 2 学校及び生徒の実態

研究校のM中学校の体育分野の授業は、基本的には、2クラスの男女合同で、1クラスは約30人ほどであるため、約60人ほどの生徒を2人の教師(いわゆるTT)で教えている。(男女合同といっても、集団競技等で男女混合のチームを作るわけではない。)保健分野の授業時は、教師が分担して、1クラスごとに教室で行う形をとっている。

約半年間のサポーター活動の中で感じた、生徒たちの体育分野の課題は、個人競技(主に陸上競技)では、競技に対する興味関心が低いことや、技術向上に関しての意欲があまり感じられないこと。集団競技では、

仲間たちと一緒に体を動かすことに喜びを感じている生徒が多く、楽しそうに保健体育の授業を行う様子がかがえたが、生徒からは、とにかく楽しくゲームができればよいという雰囲気が感じられた。試合の質でみても、個々の技能レベルが高いとは言えず、生徒は、運動やスポーツ本来の楽しさを味わうことができていないと考えられる。

### 3 課題の焦点化

#### (1) 体育理論学習の重要性

先に述べてきたように、2008年の指導要領改訂で、確かな学力を身に着けさせることが提言され、これまで、「できる」を重要視してきた保健体育科でも、体育的学力を身につけさせるために、学習指導要領には「技能」「態度」「知識・思考・判断」という3つの枠組みから学習内容が設定され、その学習内容をしっかり身につけさせるベースとして「わかること(知識)」が重視された。

佐藤・友添(2011)は、今求められる保健体育の授業は、運動やスポーツをすることで適度に汗をかいて楽しいだけで終わったり、運動やスポーツの技術が断片的にできたりするだけではいけない。学習指導要領の改訂で、保健体育の目標に、新たに「生涯にわたって」という文言が付け加えられたことからわかるように、知識基盤社会ということのを的確に捉え、21世紀に生きる子どもたちの長い生涯を見据えたとき、彼らが健康で生きがいをもって生涯を生き抜いていくために、運動やスポーツが一層重要になると考えられる。だからこそ、運動やスポーツを知的なレベルで捉え、できることと同時に、運動やスポーツの仕方、あるいは原理や法則、そして社会的な意味や文化的意義をわからせることが保健体育の授業に求められていると述べている。

#### (2) 中学校体育理論学習の変遷

出版年	名称	内容
1947年	体育理論	・体育史・体育の目的・各種運動の解説・運動練習法・スポーツマンシップ・家庭体育・社会体育・国際競技・余暇の利用・運動衛生
第1次改定 1951年		・体育史・体育の目標・レクリエーション・家庭体育・運動衛生・国際競技
第2次改定 1958年	体育に関する知識	1年生…運動の種目の特性と理解・練習の重要性と練習に関する諸条件・練習の方法 ・運動生活の設定 2年生…運動の身体的効果・運動の精神的効果 3年生…競技会・生活と運動によるレクリエーション

第3次改定 1969年	体育に関する知識	・中学校生徒の特性と運動・運動の特性と練習・運動の効果・体力の測定方法と結果の活用・現代の生活と運動・運動によるレクリエーションの現状
第4次改定 1977年		・運動と心身のはたらき ・運動の練習と体力測定
第5次改定 1989年		・運動と心身の働き ・体力の測定と運動の練習
第6次改定 1998年		・運動の特性と学び方 ・体ほぐし・体力の意義と運動の効果
現行 指導要領 第7次改定 2008年	体育理論	1.2年生… ・運動とスポーツの多様性 ・運動とスポーツが心身に与える効果と安全 3年生… ・文化としてのスポーツの意義

表1：体育理論の学習内容の変遷

出原(1995)によると、戦後民主主義時代の日本では、スポーツ文化の発展論を学んでいたとされる。各国のレクリエーション政策を知り、自分たち自身の余暇活動の在り方、ライフスタイルの設計能力の基礎を学び、スポーツ文化の主体者として、この豊かな文化の継承・発展の理論を学ぼうとしていた。スポーツの見方・考え方が中学生、高校生に求められ、「教室でやる体育」「頭を使う、考える体育」が実践されていた。このようなすぐれた先行経験と実践を日本の体育科教育はもっているのである。

また、スポーツに関しては1964年の東京オリンピックを契機として、スポーツへの関心が高まり、国民のスポーツ実践の幅広い展開が見られた。この頃の日本のスポーツ研究では「競技力向上」のための自然科学的研究は急速に深化したが、残念ながら文化的研究においては部分的な成果を見たのみであった。

これに並行して学校教育でも「体育理論」の教科内容が改訂をくり返すごとに質、量とも貧弱になったことが、さまざまな文献で指摘されている。文化的な側面は「実用的」スポーツ論に終始し、一方で技能習熟は改訂ごとに強調されてきた。

このように戦後の学習指導要領の変遷を概観すれば、少なくとも文化としてのスポーツの学習を実技と理論の両面から進めようとしていた基本枠組みが変更され、理論学習軽視、技能習熟重視・偏重という偏ったカリキュラム構造となっていくことが明らかとなる。「体力づくり」的な方向に傾いていた体育科教育は1977年改訂以降から「楽しい体育」という考えが出始め、カリキュラムの方向性に変動が見られたが、体育理論学習の内容は文化的側面を取り戻すまで至らなかった。

しかし、2008年改訂の現行学習指導要領では知識基

盤社会の中で生きる力をはぐくむという理念がより一層重要視された。伴って保健体育科では「運動の特性を総合的にとらえること」が重視され、体育理論学習の内容が大幅に見直され、文化的な内容が取り戻されることとなった。また、体育理論への名称変更、及び高校への接続をかんがみ、中学校、高等学校において、運動に関連させて教える知識と体育理論で教える知識の明確化及び体育理論の時間数を、各学年3単位時間以上と明示した。

学習内容の項目に関して、菊（2010）は、現行学習指導要領における「体育理論」の目玉は、第3学年で取り上げられる「文化としてのスポーツの意義」であり、中学校段階でスポーツを文化として捉える学習はこれまでになかったものであるため、画期的なことであると述べている。

### （3）体育理論学習の現状と課題

学習指導要領に示された体育教科の教育のうち、「体育理論」はもともと授業実践が低調な領域であるとされる。吉田（2016）によると、これまでも「体育理論」は必修とされ、学校、教師の判断で時間数や内容も決めて行われていた。しかしそれは、「雨降り体育」として、あるいは各単元の、例えばオリエンテーションの一コマとして実践されるレベルの扱いであり、決して系統立てて行われていたとは言い難い状況である。さらに、体育理論は不毛の領域とされ、不要論が出されるほどであり、実践の蓄積も乏しい。という指摘がなされている。

以上のことを踏まえると、体育理論の学習は、各学年3時間以上という時間が定められ、必修として年間カリキュラムに位置づけられているが、現状としては、明確にカリキュラムの中に位置づけされているとは言えない。協力校であるM中学校についても、同じことが言えるのではないかと考えた。

そこで、事前に、M中学校の体育教師5人に体育理論の実施状況についてのアンケートを行った。「今まで行った体育理論の授業はどのように実施しましたか（複数回答可）」という質問に対して、5人中4人が「保健と一緒に実施」と回答した。「実施したことがない」という回答は見られなかったが、「単元として実施」「各種目のオリエンテーションとして実施」（実技分野に絡めて実施）という回答は、それぞれ1人だけだった。また、「体育理論の授業を実施するにあたり、困ったこと」という質問に関しては、「内容が扱いづらい」との回答が多く、その他にも、「時間が取りづらい」「子どもの反応が良くない」「運動することが重要」という回答が見られた。

この結果から、M中学校でも、体育理論学習が、力を入れて行われているとは言えない現状であると言える。しかし、体育理論学習に対して、決して消極的なのではない。同アンケートの、「体育理論学習の目的

や、得られる学びはなんだと思いますか（自由記述）」に対して、「スポーツへの興味関心が高まる」「生徒の生涯スポーツへつながっていく」という肯定的な回答が多かったことからわかるように、冒頭でも述べているが、生涯スポーツ社会を担っていく子どもたちにとって、体育理論学習は必要不可欠の知識であり、学校における体育科教育では、スポーツ文化の継承・創造の担い手としてふさわしい基礎的能力を育てる必要があるという、体育理論学習の有用性への理解があっても、年間カリキュラムの問題や、授業づくりという点で難が見られ、積極的な取り組みへ至らないのではないかと考えられる。これは、M中学校に関わらず言えることであるだろう。

### （4）体育的学力について

先に述べたように、2008年の学習指導要領改訂では、各教科の学力の保障が重視された。教育分野で「学力」が問題になると、体育では「学力」ではなく、決まって「体力」が問題にされてきた。その根本的な理由は、戦前の体育＝体力づくりという考え方が根強く残っているからであると考えられる。確かに体力を育成することは体育の重要な目標の1つであるが、体育の授業で習得させようとしていることはそれだけではない。

体育科の指導目標・内容は、下図のような構造で捉えられた。

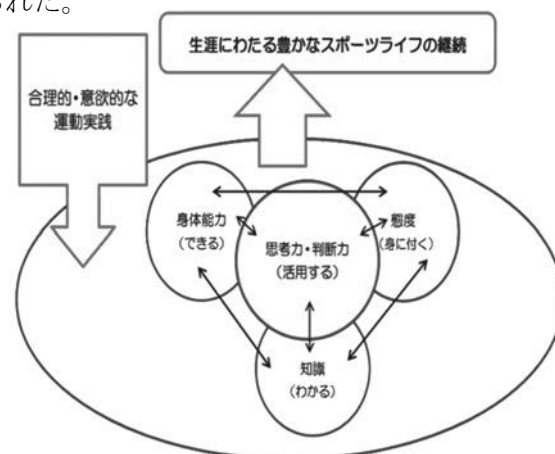


図2：体育の目標構造（中教審）

高橋（※2）は、体育科は「身体能力（体力＋技能）」、「態度（社会的な態度）」、「知識、思考・判断」を具体的な目標とし、これらの目標の総和として生涯スポーツの継続的实践につながる価値的な態度や実践力を育成していくことが確認された。学習（指導）内容の視点からいえば、身体能力は「運動技術・戦術や体力づくりの方法の学習」であり、態度は「運動の社会的行動の学習」であり、知識、思考・判断は「運動技術や社会的行動に関わった知識や学び方の学習」ということになる。このことからわかるように、体育で身に付けさせたい能力は、体力に一元化することはできない。これらの学習内容を総合

的に習得した能力や態度を「体育的学力」あるいは「体育の学力」と表現したのである。と述べている。

この考えを受けて、本稿で扱う「体育的学力」とは、「学習者が、学習内容（各運動領域で示された『技能』『態度』『知識、思考・判断』および『体育理論』）を身につけることによって備わった能力のこと」と考えることとする。

### Ⅲ 研究の構想

#### 1 実技単元への体育理論学習の位置づけ

近年、体育理論学習は、学習内容を系統だてて、単元として実施する必要性が指摘されているが、本研究では、M中学校の現状に合わせて、体育理論学習の有用性の検証を優先させることとする。よって、単元としてではなく、単発であるが、実技単元の中に位置づけることで、まず「時間が取りづらい」「子どもの反応が良くない」という問題点を改善できると考えた。

また、実技単元の中に組み込む場合、単元の始めに、オリエンテーションとして位置づけられることが多い。しかし今回は、単元の中盤に位置づけることを提案する。映像資料を使って、実技単元のスポーツの動きのイメージを作る場合、そのスポーツが、一般的なものであれば、ある程度自分たちの苦手や、課題意識を持たせてから映像を使用した方が、見る視点をしぼりやすく、より実践にいきる学びとなるであろうと考える。さらに、授業の仕方によっては、単元前半部分の生徒たちの映像を撮影しておく、生徒たちの興味関心を高め、かつ比較対象として使用できると考えられるので、「できる」につながる「わかる(知識)」の獲得において、より有意であると考えた。

#### 2 生涯スポーツ社会を担う生徒の育成

運動をする子どもとそうでない子どもとの二極化は、依然深刻である。M中学校の生徒も、いわゆる体育会系と文化系の生徒で、体育に対しての意欲が大きく分かれる。しかし、冒頭でも述べたように、今後長い人生を生きていく中で、スポーツに関わっていくことは、必要不可欠であることは、もはや周知の事実である。

スポーツや体育が嫌いな生徒は、「できないから嫌い」という場合が多い。「できない」ことが発端となり、スポーツへの意欲や興味関心が低下しているのではないだろうか。また、スポーツの世界は、勝ち負けの世界でしかないと思っている生徒も少なくない。

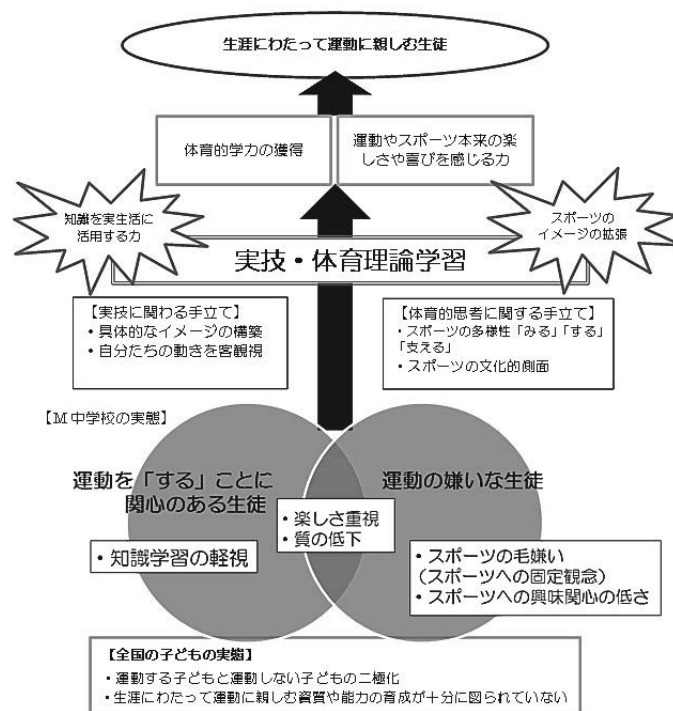
スポーツの良さは、勝負に関わる事柄や「する」に偏った側面だけではない。体力向上やダイエット効果、気分転換などの健康に関わることはもちろん、人々のコミュニケーション手段や生きがいになった

り、国際親善・地域振興に貢献したりと幅広い魅力があり、「する」他に「みる」「ささえる」といった関わりもある。

本研究では、体育理論学習を扱うことで、生徒の持つスポーツへのイメージの拡張を図りたい。スポーツや体育が嫌いな生徒に関しては、知識学習を充実させることによって、いままで触れてこなかったスポーツの魅力を感じさせるとともに、「できる」イメージの構築に役立つと考える。さらに、「みる」「ささえる」といった「する」以外の部分を扱うことで、遮断されていたスポーツへの意欲や興味関心を取り戻し、自身の生涯スポーツを見直すきっかけづくりになると考える。

また、スポーツや体育が嫌いな生徒だけでなく、「する」ことに興味のある生徒に関しては、知識学習が、「できる」ことの基盤になることを体験させることで、自身のスポーツ活動に活用させる力を養うことができると考える。また、スポーツ本来の楽しさや魅力を扱うことで、スポーツに関わる興味関心を高め、実技分野の質を上げることができると考える。そこで、本研究では、単に「体育理論」の知識を習得させるのではなく、「体育理論」の知識を核に、生涯スポーツとのかかわりの見直しや、運動やスポーツへの興味関心・意欲の向上や思考・判断力の獲得へ広げていきたい。

#### 3 研究の構想図



#### 4 研究の仮説

##### 仮説1

体育理論学習を、実技単元の中盤に位置づけることで、知識学習は、実技分野の学習に有意にはたら

くであろう。

## 仮説 2

知識を核にした学びは、運動やスポーツ本来の楽しさや魅力を感じる力となり、その力が基盤となって、生涯にわたって豊かなスポーツライフを送ることにつながるであろう。

## IV 研究にかかわる教育実践

### 1 教師力向上実習 I にかかわる実践と考察

単元：陸上競技「短距離走」授業時数：5時間完了

対象：1年生 男子18人、女子14人、計32人

#### (1) 生徒の実態

授業前にアンケートを行った結果、「運動やスポーツが好き（4段階中4と3）」で、かつ「体育の授業が好き（4段階中4と3）」と回答した生徒は28人で、体育に関して意欲のある生徒たちである。しかし一方で、今回の実技単元である陸上競技に関しては、「興味がある（4段階中4と3）」と回答した生徒は20人とどまった。このことから、運動やスポーツには興味があるながらも、陸上競技には若干非意欲的であるということがわかる。また、中学生になって初めて学習する体育理論の関係の質問においては、「運動をするには知識が必要である」と回答した生徒が24人と、予想よりも多く、運動やスポーツにおいて知識が必要であるという認識があることがわかった。

#### (2) 授業の実際

単元の目標を「クラウチングスタートを使用し、50m走のベストタイムを縮める」と設定し、5時間完了で実践を行った。単元の流れは以下のとおりである。

時間	1	2	3	4	5
ねらい	50m 走のタイムを計測しよう。	スピード曲線を作ろう。	スポーツの学び方を知ろう。 クラウチングスタートのポイントを理解しよう。	クラウチングスタートを極めよう。	記録会で記録を伸ばそう。
学習内容	・初めてのクラウチングスタート ・50m 計測	・10m ごとのタイム計測 ・スピード曲線作り	体育理論 「運動やスポーツの学び方」	・クラウチングスタートの練習	・中間疾走、フィニッシュの練習 ・50m 走記録会

1限目はまず、自分が思うやり方でクラウチングスタートを行わせ、50mのタイムを計測した。2限目は、10mごとのタイムを計る活動を行い、個々で50mのスピード曲線を作成させた。この学習の目的は、「スタートへの意識付け」を行うためである。スピード曲線を作成した結果、多くの生徒が、スタート～10mのラ

ップタイムが、他の区間に比べて遅いことが、目視で認識できるようになった。その結果、生徒はスタート～10mのタイムを縮めるためにはどのようにすればよいか考えるようになり、単元の目標に向けて課題意識を持たせることができたと考える。

3限目は、課題意識を持たせた上で、体育理論学習を位置づけた。まずは、中学校から新しく始まる体育理論学習について、見通しが持てるように、どのような内容なのかを説明してから、本時の学習へ移行した。前半では、技術、戦術、作戦、PDCAサイクルなど指導要領で示された体育理論の重要語句についておさえ、後半では、電子黒板を使用し、陸上競技選手のスタート時の映像と、実技の授業時に撮影しておいた、自分たちの映像を比べる活動を行った。前半の学習では、技能を上達させるためには、ただ量をこなしたり、努力したり、などの精神論だけではなく、PDCAサイクルという、理論的な考え方があることを押さえ、部活動など、生徒の今後のスポーツ活動に活きるように言葉を選んで授業を行った。また、実技分野の学習にも

PDCAサイクルを生かせるよう、陸上競技の授業に当てはめて考えさせた。（図3）

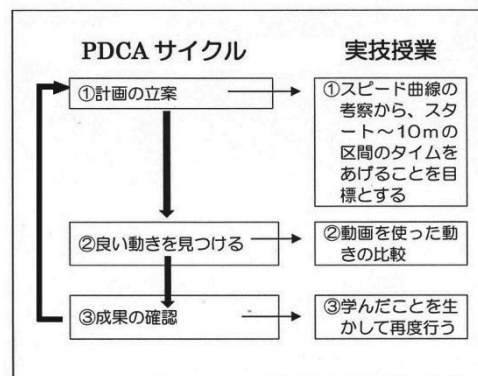


図3：PDCAサイクルと実技授業の関わり

後半の学習では、スピード曲線の分析から、「クラウチングスタートを極め、タイムを縮める」という計画の立案を行ってから、次の段階としての「良い動きをみつける」ということを意識させた。映像を使って、自分が思っているように体が動いていないことを認識したり、自分たちの目で見て、陸上選手との違いを考

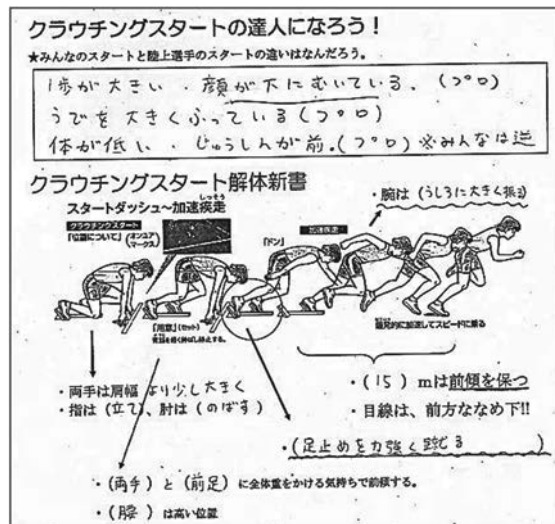


図4：運動が苦手な生徒Aのワークシート

えたりする活動を行った。気づいたことを発表させるとともに、技術的なポイントをプリントにまとめさせた。生徒からは多くの意見が挙がった。実技が苦手な生徒も、動画を見て、たくさん記述することができていた。（図4）

授業後の感想からは、「映像を見て、自分たちと陸上競技選手との違いが良く分かった」「外で行う体育と違って、細かい部分が分かって楽しかった」という記述が多く見られた。事前アンケートの関わりで見ると、「体育は、体を動かすから楽しい」「陸上競技には興味がない」と回答していた生徒でも、体育理論の授業後の感想は、「楽しかった」「動きのことが良く分かり、面白かった」という肯定的な記述が目立った。

① 実戦だけで	
分からなかった。	
『大きく手を振る』や、	
『顔が下を向いている』などか	
分かった。今日の授業は	
とても分かりやすくて	
楽しかったです。	

今日技術的作業、戦術と  
いうものをPDCAで分か  
つた。そして楽しかったの  
で、毎に数回今日の授業  
があっても良いと思った。

自分ではわからないけど、映像で 自分が走っている 姿を見て 自分がどんな走り方をしているかがよく わかりました。 私は、外で行う 体育が 苦手なので、 教室でやる 体育の ほうが 楽しいです。
次からは、映像 で見た 陸上 選手の 走り方の マネをして、足止めを なるべく けつても、と 速く 走れ る ように がんばりたいです。

図5：授業の感想

4時限目には、体育理論学習を踏まえた上で、再度スタート練習を行った。映像を見たことにより、良い動きのイメージが生徒たちの中で明確になったことや、技術的なポイントを、時間をかけてしっかり押さえた効果として、1時限目に比べ、フォームや練習姿勢に良い変化が見られた。（写真1）



写真1：目線を下げ、姿勢を低くしてスタート練習を行う生徒

5時限目には、中間疾走とフィニッシュのポイント

を軽く押さえ、最後の記録会を行った。最初のタイム計測時から、タイムが上がった生徒が半数近くおり、体育理論学習での映像による学習の効果とは一概には言えないが、練習の成果が発揮されたと考えられる。

最初の授業と比べ、50m走のタイムが上がったり、フォームの改善がみられた生徒が多かったりしたことから、実技単元の中盤に、体育理論学習を組み込むことは有意であると言える。単元の途中で座学を位置づけることで、実技の時間では流れていってしまいがちな技能のポイントを、時間をかけて学ぶ時間になるため、思考が整理されることや、主観ではなく、客観的に見る機会を生み出したことが、技能の向上に繋がったり、運動が苦手な生徒でも、具体的なイメージの確立によって、「自分でもやってみよう」という意欲向上に繋がったのではないかと考えられる。

## 2 教師力向上実習Ⅱにかかわる実践と考察

単元：球技「バレーボール」授業時数：11時間完了

対象：3年生 男子15人、女子14人、計29人

### (1) 生徒の実態

事前アンケートでは、保健体育の授業に対する興味関心や、バレーボールに対する興味関心、体育理論学習の内容についてアンケートを行った。保健体育に関しては、「運動やスポーツが好き（4段階中4と3）」で、かつ「体育（実技分野）の授業が好き（4段階中4と3）」と回答した生徒は23人で、男子も女子も、「体を動かすことが楽しい」と回答した生徒が多かったことから、体育に関して意欲のある生徒たちであると言える。

しかし一方で、保健分野等の教室で行う知識学習に関しては、「好き（4段階中4）」と回答した生徒はわずか4人で、前者の回答ではほとんど見られなかった「好きではない（4段階中2と1）」と回答した生徒が12人と多く見られた。知識学習に対してはマイナスの意見が多く、「体を動かさないから退屈」「内容が難しく、つまらない」と回答した生徒も見られた。この結果から、やはり生徒たちは、教室で行う知識的な保健体育学習には、あまり興味関心を持っていないことがわかった。

### (2) 授業の実際

#### ①はじめに

本実習では、11時間完了のバレーボールの単元の中の7時間目に体育理論学習を位置付け、バレーボールの技能向上に生かせるような授業づくりと、スポーツン文化的側面について考える授業づくりの提案を行った。単元の流れは次のとおりである。



時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
ね ら い	学習Ⅰ  運動の特性 や学習のね らいを理解 し学習の見 通しを持つ。	学習Ⅱ  ねらい① (1~5) <div>基本的な技能を身につける</div>  ねらい② (6,8) <div>チームの課題を見つけ、課題にあっ た練習を行う。</div>					学習Ⅲ  プロ選手 の動きを 観察して 自分たち の課題解 決に生か す。		学習Ⅳ  リーグ戦を行い、 単元の学習を振 り返り、学習のま とめをする。		
	準備、集合、挨拶、出席確認、準備運動、						体 育 理 論	本時の目標の確認、ドリル			
	学 習 内 容	<ul style="list-style-type: none"><li>・学習のねらいや内容・方法の理解</li><li>・安全の心得の理解</li><li>・学習カードの使い方の理解</li><li>・班編成</li><li>・試しのゲーム</li></ul>						<div>〈リーグ戦〉</div> <ul style="list-style-type: none"><li>・勝敗を競う楽しさや喜びを味わう</li><li>・ゲームの記録を踏まえて単元の反省をまとめる</li><li>・身に付けた技能を用いて仲間と連携したゲームが展開できるようにする</li></ul> <ul style="list-style-type: none"><li>・技能テスト</li></ul>			
<div>片づけ、振り返り〔学習カード〕、</div>						まとめ、挨拶					

## ②体育理論学習の内容について

まず、知識学習にマイナスイメージをもつ、生徒たちの現状を受け、実技分野にも役立つ内容にすることを第一に考えた。次に、今年がオリンピックイヤーであったため、生徒の興味関心を引きやすいオリンピックについて取り上げ、「文化としてのスポーツの意義」について考える活動を行った。この領域は、教科書では4つの小単元で構成されており、本時では、「オリンピックの文化的な役割」を選択し、以下のように授業案を作成した。

段階	学習内容	手立て
はじめ	1. 体育理論の学習について見通しをもつ。 2. 本時の学習について知る。	・知識学習の必要性の理解
なか①	ねらい① オリンピックの文化的な役割を考えよう。(20分)  3. オリンピックに関するさまざまな映像をみる  4. オリンピックの理念について知る。	・電子黒板の活用。 ・編集したオリンピック映像を2種類流す。(1つ目は、感動や努力。2つ目は、国際協調、世界平和。) ・スポーツの文化的側面に触れる学び ・スポーツ観の変容を促す。
なか②	ねらい② オリンピック選手の動きを見て、自分たちの動きについて考えよう。(15分)  5. 「みる」視点を養う。 ・オリンピックのバレーボールの映像を視聴し、気づいたことを個人でワークシートに記入する。  6. チームで作戦会議を行う。	・プロの映像を視聴。「動き」を見ることで学ぶ場の設定。  ・知識を実践で生かす場の提供。
おわり	7. まとめと感想	

本実践では、少しでも体育理論の学習に興味関心を向けるため、電子黒板を使用し、映像資料を多用することにした。内容について、以下順に考察していくこととする。

## 【なか①】

前半の学習として、なか①では、「オリンピックの文化的な役割を考えよう」とねらいを設定し、本年に行われたリオオリンピックの総集編映像を見ながら、スポーツやオリンピックがもつ力について、生徒たち自身に考え、感じさせるとともに、学習指導要領で定められた学習内容を追っていった。尚、学習指導要領解説には、「文化としてのスポーツの意義」の内容の取り扱いに関しては、以下のように示されており、本時は特に、「イ」に該当する内容である。

文化としてのスポーツの意義について理解できるようにする。

ア：スポーツは文化的な生活を営み、よりよく生きていくために重要であること。

イ：オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること。

ウ：スポーツは、民族や国、人種や性、障害の違いなどを超えて人々を結び付けていること。

映像の前半では、日本人メダリストの競技映像や、応援する家族や国民の映像を視聴させた。生徒からは「感動や夢を与える」「誰もが楽しめる」「努力の証が見えた」などの感想が挙がった。選手の姿や、世界レベルでの競争が印象に残ったようであった。これらは、オリンピックに対する一般的なイメージとさほど変わらない意見と言える。後半では、主に外国人選手が登場し、国を超えた選手同士の友情や、発展途上国や紛争の行われている国からの参加選手を取り上げた映像を視聴させた。生徒からは「スポーツは、国を超えた絆を生む」「国際交流の場になっている」「勝つことだけでなく、いろいろな思いをもった選手がいる」という感想が挙がり、国際親善の場としての側面をもつオリンピックへの理解が深まったと感じた。

その後は、シンボル（五輪）の意味や近代オリンピックの生みの親であるクーベルタンと、オリンピズム（オリンピックの理念）について取り上げた。オリンピックは、メディアの影響を受け、メダルを取った取らないに偏った、勝利至上主義に近い形で報道されがちである。しかし、本来の理念としては、「平和の祭典」という目的があるということを生徒に伝えることが、指導要領でも示されている。また、スポーツは、国や言語、文化などさまざまな違いを超えて、人々を結びつけることができるという内容の学習も行った。この部分に関しては、生徒の反応も大きく、授業後の感想からは、「スポーツは、人同士を結び付ける良いものだ」と改めて感じた」「理念について知ることができ、オリンピックの見方が変わった」という記述が多く見られた。さらに、「オリンピックはスポーツの得

意な人が競っているだけで、あまり興味がないと思っていたけれど、良い面がたくさんあったので、今後は見てみたい」という記述も見られ、オリンピックの良さや魅力について考えたことが、多くの生徒の印象に残ったと考えられる。

以上から、なか①では、ICTを活用したことで、内容が伝わりやすく、オリンピックへの理解を深めるとともに、興味関心を高めることもできたと考える。

#### 【なか②】

具体的なねらいは、「バレーボールのオリンピック映像を見て、これからの練習や課題解決に向けて、チームで話し合いができるようにする」と設定した。本時は、バレーボールの7時間目に位置する。単元後半のリーグ戦に向けて、個人やチームの課題が明確になっている段階であるため、オリンピック選手の映像を視聴し、正しい技術の具体的なイメージの構築や、戦術やチームプレイの新しい方法の発見の手助けになればと考えた。

実際に生徒たちは、男子も女子も、バレーボールの映像を真剣に見て、自分たちの動きとの違いをたくさん書き出すこ

とができていた。女子生徒の中には、オリンピック選手のフォーメーションを図で書いて（図6）、自分のチームの今後の作戦などを、具体的に話し合いに役立てようとしている様子も見受けられた。

実技の授業でも、毎授業後にチームでの振り返りや、次の練習方法の検討の時間を設けていたが、今回は、手本となる映像を見ながら、ゆっくり話し合う時間を取ることができたことにより、より具体的な話し合いにつなげることができ、生徒たちにとって有意義な時間になったと考えられる。（写真2）



写真2：映像を見て、作戦について話し合う生徒

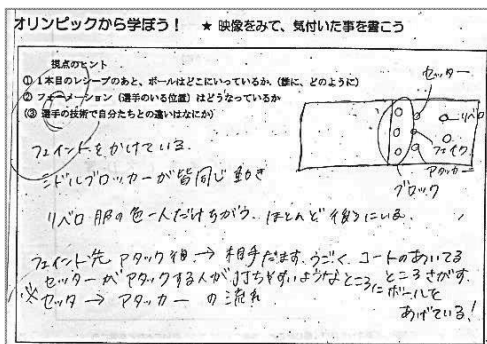


図6：生徒Bのワークシート

授業後の感想では、「オリンピック選手の映像を見て、自分たちに足りないところが分かったので、次の授業に生かしたい」という記述が多く見られた。また、「フェイントなどを使って、かけひきを楽しむこともやってみたい」などの具体的な技術面に関する記述が見られたり、「スポーツはやることだけでなく、みることも大切だと気付いた」という、映像資料を使った成果も得られた。

#### 【おわり】

最後に、感想として、授業を通して深まった学びや、感じたことを書いてもらった。オリンピックに関する感想が多かったことから、スポーツやオリンピックの文化的側面について扱った場面が、一番生徒の印象に残る授業であり、いままでのスポーツやオリンピックに対するイメージを転換・発展させるきっかけづくりとなる授業になったと言える。次に多かったのは、バレーボールに関する感想で、いままで、バレーボールの試合映像を見たことがなかった生徒も多く、さまざまな学びが得られる場になったのではないかと考えられる。

★本時の感想★ 授業を通して深まった学び、感じたこと、今後の活動に生かしたいことなどを書く。

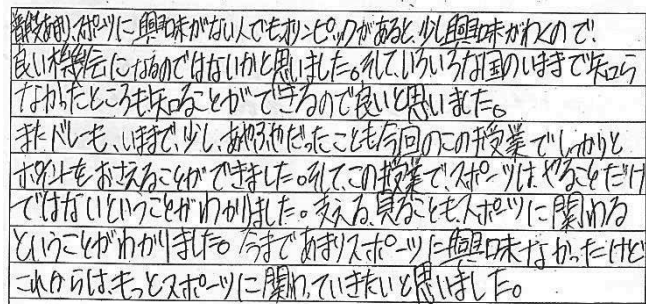


図7：授業の感想

#### ③アンケートの考察から

（※以下円グラフ中の回答4,3,2,1はそれぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」である。）

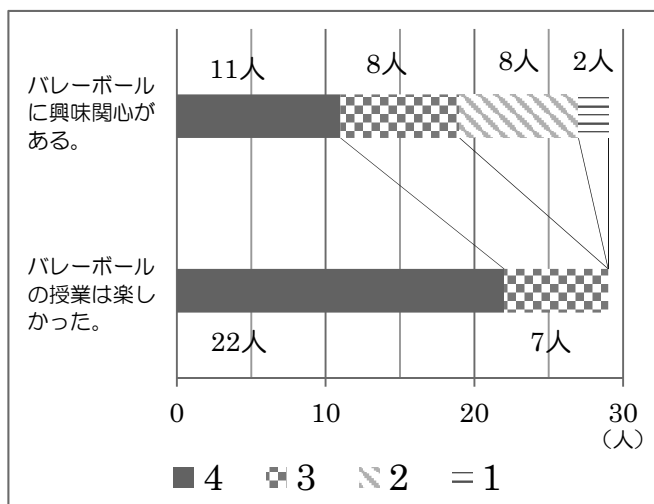
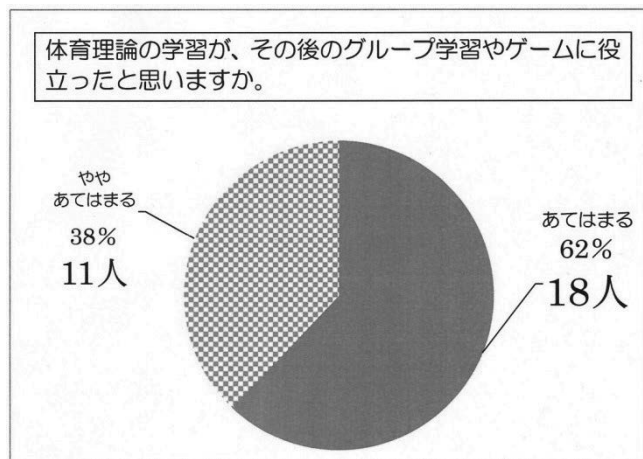


図8： 上 事前アンケート「バレーボールに興味関心がある」  
下 事後アンケート「バレーボールの授業は楽しかった」



単元終了後に、授業全体に関するアンケート（以下、事後アンケート）を行った。まず、図7で示したとおり、事前アンケートでは「バレーボールに興味関心がない（4段階中2と1）」と回答した生徒は10人いたにも関わらず、単元終了後「バレーボールは楽しかったですか」という質問に対しては、すべての生徒が「楽しかった（4段階中4と3）」と回答した。体育理論学習が、バレーボールに対しての興味関心や意欲の向上につながったと考えられる。



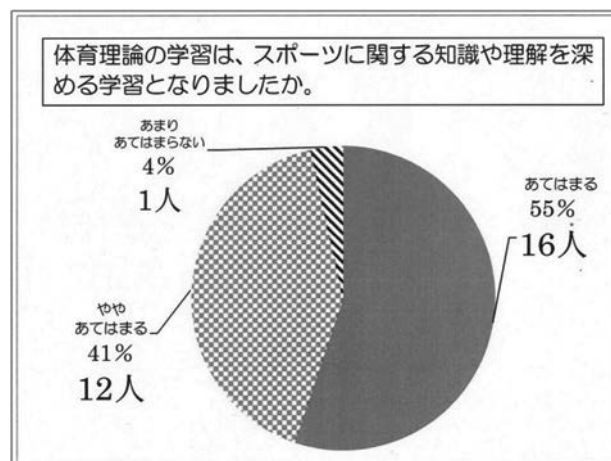
#### 【自由記述欄】

- ・新しい視点から客観的にチームのプレイを見直すことができた。
- ・上手な選手を参考にして、自分のプレイをよりよくできた。
- ・ボールの落下点に入り込むことや、必ずセッターに反して攻撃するなど、映像で良く分かった。
- ・オリンピック選手の動きを見て、自分が想像していた理想の動きと、少し違いがあることに気づけた。
- ・ただ三段攻撃をするだけでなく、わざと2回で返したり、フェイントをいれるなど、いろんな攻撃が学べた。
- ・その後の実技では、みんな積極的にボールを取りいけるようになり、フォームなどを真似しようという努力が見られ、チームの雰囲気向上した。
- ・三段攻撃とかの配置が変わった。みんな積極的になった。
- ・動く範囲やボールの飛ばし方を真似することで上達できた。

図9：事後アンケートまとめ①

また、事後アンケートの「体育理論学習は、その後のグループ練習やゲームに役立ったと思いますか」という項目に対して「役に立たなかった（4段階中2と1）」と回答した生徒は、ひとりもいなかった。（図9参照）具体的な記述として、「体育理論をやったことで、見えなかったものが見えるような気がした」「オリンピック選手の動きを活かして試合に勝つことができた」「新しい視点から客観的にチームのプレーを見直すことができた」など肯定的な意見がほとんどを占めた。このことから、生徒のほとんどが、体育理論で学んだ知識を、実技分野の学習に生かすことができたと言える。ただ、今回は、オリンピック選手の映像のみしか

使用しなかったので、「技術レベルが高すぎて、参考にするのは難しいと思う」という記述も見られた。



#### 【自由記述欄】

- ・スポーツに関する知識が良く伝わった。
- ・スポーツは勝ち負けだけではない。というところが印象的だった。バレーなどの知識、異文化などの理解に気づくことができ、良い学習だったと思う。
- ・スポーツやオリンピックに意味があることを理解でき、たし、「体育」という授業に対する考え方が変わったのでとても良い学習になった。
- ・スポーツの苦手意識が少し減って良かった。やるならもう一時間ぐらいやってほしい。
- ・あまり今まで触れなかったことについて触れて、もっと知りたいと思った。

図10：事後アンケートまとめ②

また、学習指導要領の内容（オリンピックの文化的な意義）を含めた体育理論学習全般の満足度に関しては、事後アンケートの「体育理論学習は、スポーツに関する知識や理解を深める学習となりましたか」という項目において、1名を除くすべての生徒が「なった（4段階中4と3）」と回答した。具体的な理由の記述は、「スポーツのおもしろさや感動を知ることができ、スポーツは楽しいものかと思えた」など、図10に示したとおり、「オリンピックやスポーツに関する理解が深まった」という意見が多く見られた。また、事前アンケートにおいて「保健等の教室で行う保健体育の授業が好き」という項目に関して「好きではない（4段階中2と1、主な理由は、体を動かさないから退屈）」と回答した生徒からも、体育理論学習に対しては、「スポーツの良さを改めて知ることができた」「頭を使えばもっと体育は面白くなる」等の肯定的な回答が見られた。

以上のことから、体育理論学習を通して、知識学習が実技分野の授業にも有効であることを、生徒自らが実感し、知識を実生活に活用する場を提供できたと言える。また、体育理論学習を通して得た、ス

ポーツの新たな側面は、生涯スポーツを見据えた教育として有意であり、より運動やスポーツに親しむ、体育的学力を培うことができたのではないと言える。

## V 研究の成果と課題

### (1) 成果

①体育理論学習を、実技単元の中盤に位置することで、自分たちの課題に沿って、映像資料を活用することができ、「する」のみの活動では補いきれない、技術面の学びを提供することができた。客観的に自分たちの動きを見ることができ、正しい動きのイメージを、落ち着いた場で学ぶことで、理解が深まったことによる効果だと考えられる。

②映像資料を使って、「みる」という活動を取り入れた結果、「する」ことに偏っていた運動やスポーツのイメージを転換・発展させることができ、スポーツの面白さについて、改めて考えさせることができた。バレーボールの授業に関しては、「ただゲームができればよい」という雰囲気から、ブロックやフェイントを使った攻撃が生まれ、バレーボールの特性である「ネット際の攻防」や「空いている場所への攻撃」などへの興味関心・意欲を向上させることができた。

③実習Ⅱの実践では、「スポーツの文化的側面」について扱った成果として、2020年の東京オリンピックへの興味関心が高まると同時に、スポーツがもつ新たな魅力に気づき、生涯にわたって運動やスポーツに親しむきっかけづくりができた。

### (2) 課題

①本研究では、実技単元の中に体育理論学習を位置づける提案を行ったが、年間カリキュラムとの兼ね合いや生徒の実態などの協力校の現状を踏まえた結果、体育理論の授業は、それぞれの学年で、単発で1回のみしか行うことができなかった。

本研究で目指したのは、体育的学力を培うことや、スポーツ本来の楽しさや魅力を伝えることを通して、生徒自身の生涯スポーツに繋がる資質や能力を育てることであった。生涯スポーツへの入り口として、スポーツ観を広げたり、「できる」と「わかる」をつなぐ学習として、知識学習の価値づけを行うことができた面もあるが、もっと実践の数を増やしていく必要がある。

さらに、今後の保健体育科の課題として、体育理論学習は、系統だてて行う必要性が、さまざまな文献で指摘されている。特に、実習Ⅱで取り上げた「文化としてのスポーツの意義」は、高校の学習内容との接続も考慮して、実技の単元に組み込むのではなく、時間をかけて学ばせたい内容である。実習Ⅰ、Ⅱのどちらの実践でも、数名の生徒から「もっと体育

理論の授業を受けてみたい」という感想を得ることもできたため、今後は、体育理論の学習をもっと定着させるためにも、ある程度連続した、系統的な授業づくりを行っていく必要がある。

②本研究では、体育理論を実技単元の中盤に位置づけることを提案し、生徒の技能や意欲向上をねらいとしたが、実習Ⅱの体育理論学習では、生徒たちの映像を使用することができず、オリンピック選手の映像のみを使用した授業展開となった。感想や事後アンケートからは肯定的な意見が多く見られたが、やはりレベルが高すぎて、特に女子は、実際のプレーにいきる部分は少なく、実技の授業で、個人的な声掛けを行った方が、技能面の改善には有効だったかもしれない。チームでゆっくり話し合う機会を提供できたことは、ひとつの成果であると感じたが、授業づくりに関しては、スポーツに関する情報収集とともに、生徒の実態をしっかりと把握し、それぞれの教材を関連させながら精選していく必要がある。

### 【引用・参考文献】

- ・文部科学省中央教育審議会（2008）『新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について（答申）』
- ・佐藤豊・友添秀則編（2011）『たのしい体育理論の授業をつくろう』p2-3, 大修館書店
- ・岡出美則（2016）『学習指導要領における体育理論の変遷』『体育科教育』第64巻第10号, p17
- ・出原泰明（1995）『「教室でやる体育授業」のひとつの試み—「ボール授業」の実践モデルの意義—』和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 5, p147-154
- ・菊幸一（2010.9）『「体育理論」重視の背景と学習指導のポイント』, 保健体育ジャーナル, 90, p1-5
- ・吉田文久（2016.1）『学校体育における「体育理論」の新たな位置づけとその授業づくり（その1）—「文化としてのスポーツ」の学びを位置づける授業の構想に向けて—』日本福祉大学子ども発達学論集第8号, p1-2
- ・文部科学省（2008）『健やかな体を育む教育のあり方に関する専門部会、体育分野ワーキンググループにおける審議権等について』p.13
- ※2 高橋健夫『体育的学力を高める体育実践を求めて』
- ・文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東山書房
- ・文部科学省中央教育審議会（2008）『幼稚園、小学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）』
- ・体育授業研究会（2015）『よい体育授業を求めて—全国からの発信と交流』大修館書店
- ・福田隆太郎（2011）『「体育理論」の知識を実生活に生かそうとする生徒を育む学習指導—知識を獲得させるための教材・発問の工夫を通して—』長期派遣研修報告書 福岡県体育研究所 p1

### 【付記】

本研究は、愛知教育大学教職大学院の実習の一環として、連携協力校で行わせていただきました。実習中は、御多忙の中、校長先生、保健体育科の先生方をはじめとする多くの先生方に、丁寧なご指導をいただきました。連携協力校のすべての先生方に、心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、愛知教育大学教職大学院での講義、学校サポーター活動、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ、修了報告書作成にあたり、温かく丁寧にご指導下さった杉浦宏幸特任教授をはじめ、すべての先生方に、心より御礼申し上げます。